群馬大学大学院 医学系研究科 病態総合外科学（第一外科）

群馬大学医学部は昭和18（1943）年５月に前橋医専として開設され、同年８月には外科学第一講座の生みの親である石原恵三教授が医専附属医院初代院長に就任されました。翌年８月から石原教授により外科学講義、外科手術が開始され第一外科歴史の幕開けとなりました。そして、平成10（1998）年５月より、私が第４代教授に就任し現在に至っています。現在、同門会員数は約350名、大学医局および40以上の関連施設をローテートする教室員は90名を超えています。

第一外科は、生命倫理、患者の権利を重視し、warm heart、cool head、skilled hand を超えた、国際性のある幅広い診療を手掛け活動しています。診療は食道班、胃班、肝胆膵班、大腸肛門班、呼吸器班、内分泌外科班、小児外科班、移植外科班から構成されていますが、特に食道癌治療や消化器外科・呼吸器外科における低侵襲、機能温存を重視した鏡視下手術は、国際的にも非常に高い評価を得ています。また現在は新たな医療機器の開発、マルチメディアの導入にも力を注ぎ、さらに癌の基礎的研究成果に基づいた遺伝子治療は強力に推進すべき領域として努力しています。また当講座では、関連各科や地域関連病院との連携がとれており、合同カンファレンスやセミナーを定期的に行い、総合的診療を行っています。われわれは日夜、病める人を癒せる心を持った全人医療を基盤とし、多領域に及ぶ専門性の高い知識・技術を備えた医療を目指しています。

現代は教室を取り巻く環境は目まぐるしく変化していますが、それらについて十分に多元的に状況を認識してわれわれの「在り方」を思索する鳥瞰図（bird view）的な視野からの観察が重要と考えています。また一方で教室員一人ひとりの考え方、生き方、意欲、そして誇りにそれぞれ応じた対応という虫瞰図（insect view）な視点も大切にし、さらに向かうべき方向の周囲の状況の動向、世の中の動き、などを読む、例えば魚が潮の流れを感じるが如き、「魚の感性」（fish sense）ともいうべき感受性も大切となってきます。これは、世間の流れに身をまかせたり迎合することでは決してありません。むしろ、それと逆の判断をすべき時もあるでしょう。このような「bird view」「insect view」という「macro」な視野と「micro」な視野、そして動的なものを察知する「fish sense」を備えたような教室員を一人でも多く輩出し、さらに次に続く大志をも持った誇り高き若者、若き外科医のために「一流の外科学教室」たるべくその在り方を求めて、また「かけがえのない存在としての教室」としての「レーゾン・デートル（存在価値）」を教室員の崇高な共通認識のもとに形成すべく教室員一丸となって歩み続けています。

（桑野　博行）